

## 「福祉ふれあい運動会に参加して」

小松市立芦城中学校 3年

村 上 詩 織（むらかみ しおり）

私は以前に、「福祉ふれあい運動会」というものにボランティアとして参加したことがあります。福祉ふれあい運動会とは、体に障害がある人のための運動会です。そしてボランティアは、会場の準備や後片付けをはじめ、補助として一緒に競技に出たり競技のサポートをしたりしました。

私が会場に着いたとき、すでに何人かの人に来ていました。目が見えない人や耳が聞こえない人、車椅子をこいでいる人など様々な人がいました。そんな人たちをはじめ見たとき、私は変な人だなと思い少し距離をおいてしまいました。私の最初の仕事は、補助として五十メートル走と一緒に出ることでした。私が補助するのは、六十歳ぐらいの目の見えないおじいさんでした。私が

「よろしくお願いします」

と言うと、

「わし、目見えんし頼りにしとるよ。」

と言われました。私は、おじいさんは目が見えないからそんなに速くは走らないだろうと思っていましたが、おじいさんの走るスピードは予想以上に速くて驚きました。私がおじいさんを引っぱるのではなく、私がおじいさんに引っぱられるようなかんじになってしまい、変な感じがしました。おじいさんはダントツの一位で、私がそのことを告げると、すごく嬉しそうに、

「ありがとうね。楽しかったわ。」

と言ってくれました。私もこの時はすごく嬉しくて、楽しかったのを今でも覚えています。

次の私の仕事は、障害物競走のスタートを見張る係でした。その時私が目についたのは、障害者の後に付き添う介護さんの姿でした。介護さんは休む間もなく、

「おもしろそうやね。」

や

「あれ難しそうやんねえ。」

などと話かけていました。話かけられた障害者の人は、「うんうん」と頭をうなずかせる

だけでしたが、その顔はとても楽しそうでした。

途中、聴覚障害者の人達が会話をしているのを見かけました。会話といっても言葉はなく、手話同士の会話でした。どんな話をしているのかは私には全くわかりませんでした。表情を見ていると笑っていたので、きっとおもしろいことを話しているのだろうなと思いました。普通だったら、聴覚障害者の人達は私達が話している会話の内容は分かりません。しかし今回は私が聴覚障害者の人達が話している会話の内容が分かりませんでした。いつもとは全く逆の立場になって、いつも聴覚障害者の人達はこんな感じなのかなと思うと、なんだか複雑な気持ちになりました。

その他にも、私はたくさんのお手伝いをしました。リレーコースの目印になったり、ゴールテープをもつ係、お弁当を配ったり、障害者の人をトイレまで連れて行ったりしました。

最後のプログラムに、「サンバ」がありました。これは、チームに関係なくみんなで楽しく踊るというものでした。私ははじめ外で見えていましたが、途中で一緒に踊ることにしました。その時、私はいきなり後ろから肩をつかまれました。何のことかととても驚きましたが、周りを見るとあちらこちらで肩をつかみ合い、小さな輪ができていました。そしてそれは、いつしか会場内にいる全員でつくる大きな輪となっていました。私はこの時、なんだか障害者の人達と心がつながったような気がしました。

すべてのプログラムが終了した時、私は、はじめ、「障害者は変な人だ」と思い距離をおき、どこかで差別していた自分はおかしかった、間違っていたということに気づきました。障害者は変な人だと思っている人はたくさんいるでしょう。特に、私と同世代の人達は多いと思います。しかし、変な人ではまったくありません。私達と同じ、笑ったり喜んだり、悔しがったり会話を楽しんだりする人間なのです。差別などしてはいけません。そして、障害者の人達は私達を頼りにしています。今回の福祉ふれあい運動会を通して、強くそのことを感じました。

世の中には障害をもった人がたくさんいます。そんな人達のために私達ができることは何でしょうか。仲間外れにしたり、冷たい目で見るといった小さなことも、差別しているのと同じです。そんな障害者差別を無くし、同じ人間同士助け合って生きていけば、世界はもっと変わると私は思います。